

叢書
宗教とソーシャル・キャピタル 2

地域社会を つくる宗教

大谷栄一／藤本頼生 [編著]



明石書店

第八章 集合墓を核とした結縁 ——「桜葬」の試み

井上治代

はじめに

戦後の日本社会の変化は一様には語れない。おおよそ一九九〇年を境に、それ以前が産業化によって成った近代社会、以後はウルリッヒ・ベック (Ulrich Beck) らのいう再帰的近代化的道を歩んでいるポスト工業化社会といえよう [ベック／ギデンズ／ラッシュ 1997]。近代化を成し遂げた後に出現した社会では、地域社会の崩壊、家族の崩壊、グローバル化が顕著になり、さらには自然もまた近代化の中で操作され、環境の危機も呼ばれている。

一九九〇年以降のポスト工業化社会に登場してきた言葉の一つに「無縁社会」がある。二〇一〇年のNHK放送の番組から発して、今や周知の語となつた。「無縁化」がクローズアップされる

ということは、それまで「有縁社会」が通常であったことにはかならない。少なくとも第一次産業が中心であった社会においては、地縁・血縁をベースとしたネットワークがあつた。「村八分」の語の意味をみても、一般の村人の助け合いが一〇分とすれば、村という地域共同体から除外された人でも、火事と葬式の二分だけは、共同体が担つたことを物語つてゐる。農業を中心とした社会では、先祖から子孫へ農地が受け継がれてこそ生活が成り立つた。そうであるがゆえに家の先祖が尊ばれ、家族・親族という集団の結束は堅く、それは世代を超えて強いつながりをもち得た。また農作業の共同は、地縁を維持するのに十分な紐帯となつたのである。ところが戦後の高度経済成長期の工業化社会では、若年層が都市へ流入し、サラリーマン化していくなかで、核家族化がすすみ、人口移動を伴つて地縁・血縁は希薄化していった。さらには一九九〇年以降、個人化がすすみ、二〇一〇年、先にも触れた無縁化と呼ばれるような社会現象が表面化したのである。

このように近代社会における確実性の崩壊とともに、個人化した社会では、ウルリッヒ・ベックがいうように「ウルリッヒ・ベック 1997, 32」 確信できるものを欠いた状態のなかで、自己と他者にたいする新たな確実性を見いだし、創造することを人びとが強いられている。そこで近年、ポスト工業化社会に適合的で地縁・血縁に代替する新たな関係性の構築が叫ばれている。中でも注目されているのは、人々の協調行動を活発にすることによって、社会の効率性を高めることのできる「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」である。

本章では、今日の無縁社会の到来を二〇〇年あまり前から想定し活動してきたNPO法人エンディングセンター（理事長・筆者）の試みから、集合墓を核とした「結縁」によるサポートネットワーク（「墓友」とも呼ばれる）をとりあげる。これまで筆者はそれを、強固な「共同体」ではなく、選択自由な「ゆるやかな共同性」「井上2008」と表現してきたが、それはパットナム「パットナム2001など」がいうソーシャル・キャピタルの二類型（結合型・橋渡し型）のうちの「橋渡し型」といえるのかどうか、本稿でその可能性を検証してみたい。

1 NPO法人エンディングセンター「桜葬」の試み

NPO法人エンディングセンターとは

エンディングセンターは一九九〇年の七月に「二一世紀の結縁と墓を考える会」として結成された。しかしその三年後に会名の「墓」を「葬送」に変えることになった。それは社会において、墓だけでなく葬式の問題も顕著になってきたことにはかならない。会名の「結縁」には、「血縁」から「結縁」への基軸の移行、すなわち家族だけで看取りや葬送儀礼が遂行でき難い社会で、家族機能に代替するサポートネットワークの必要性を主張している。同会は二〇〇〇年になって「考える会」から「実践する会」を目指して「エンディングセンター」と改名し（二〇〇七年にN

P.O法人格を取得)、「結縁」の実現に向かって二〇〇五年から「桜葬」という墓を核とした結縁(サポートネットワーク)を企画・提供している。

「桜葬」墓地

「桜葬」墓地は樹木葬の一種で、墓石を建てず桜をシンボルとする自然志向の墓である。NPO法人エンディングセンターの企画によってつくられ、その一つは、東京都町田市にある民間靈園「町田いづみ浄苑・フォレストパーク」内にあり、墓地の経営管理者は宗教法人・常照寺、業務委託代行者は(株)日本墓苑開発センターである。もう一つは、大阪府高槻市にある神峯山寺所有地内にあり、墓地経営管理者は宗教法人・神峯山寺である。NPO法人エンディングセンターは墓の経営者ではなく、墓を核としてつながる会員組織の運営者という立場にある。ただし桜葬はNPO法人エンディングセンターが企画した会員の墓であるため、必然的に桜葬の普及活動や使用権取得(販売)手続きはエンディングセンターが独占的に行っている(契約金等の振込先はあくまでも経営・管理者であつてエンディングセンターではない)。

桜葬墓地の特徴は、①自然志向であること、②継承を前提としない非継承墓であること。さらに特筆すべき特徴は、地縁や家族機能が衰退した社会に対応したシステムとして、③墓を核として結ばれる縁・絆の生成や、④看取り・葬儀・死後の事務処理等を担うエンディングサポート・システムを備えている点である。

表1 エンディングセンター「桜葬」の区画・契約・埋葬数

場所	種類	区画名	区画の種類と数			契約数		埋葬者数			
東京/町田	桜葬	En21 2005.05 ~	個別区画	5体まで	250	251	350 ~ 2007.08	350	162 38		
			共同区画	100体	1						
		木立 2007.10 ~	A一人区画	1体	152	359	359 ~ 2009.12	359	39 76 47		
			B二人区画	2体	143						
			C家族区画	5体まで	64						
		樹林 2009.05 ~	水の精	1~5体まで	188	944	177	69			
			木の精	1~5体まで	244		131	52			
			風の旅人	1段	82		81	200	373		
				2段	285		273				
			杜の家族	2段	144		89	36			
		文音 2011.04 ~	木もれ陽(共同)	300体まで	1	222	32	16			
			E区画	2体まで	96		79	18			
			W区画		120		120	38	63		
		花 2011.06 ~	C区画	5体まで	6	155	6	7			
			バラ	4体まで	102		84	40			
			エリカ		102		71	21			
			N区画					16			
			W区画					26	87		
		宙 2007.07 ~	E区画					45			
大阪/高槻	桜葬	神峯山寺 桜葬 2012.01 ~	大地の礎	2段	59	346	28	11	12		
			大地の礎以外	2段	287		27	55	1		
合計						2626	2207	958			
ECC会員墓地ではない「宙」を除く合計						2326	1907	871			

注1 数字は、2012年9月30日現在

注2 「宙」のみ、エンディングセンターの企画だが、会員墓地とはしなかった。

表2 エンディングセンター会員数(2012年9月30日現在)

一般会員	1660	1852
正会員	197	
準会員		145
特別会員(法人)		31
合計		2028

最初の桜葬墓地はE.N.2-1と名付けられ、二〇〇五年四月に完成して広報活動を開始、一〇月から埋葬を始めた。三本の桜のもとに個別区画が二五〇、共同区画（一〇〇体の遺骨が一緒にに入る合葬墓）が一つあり、すでに二〇〇七年八月に完売した。東京都町田市にある桜葬墓地は、二〇一二年九月現在に至るまで六つの墓域が完成し、そのうち三つが完売している。二〇一二年九月末の会員数二〇二八名、桜葬契約数一九〇七名、埋葬者八七一名となっている（会員の墓としてない樹木型墓地を除いた数字）。詳細は表1を参照のこと）。

〔集合墓〕である意味

桜葬墓地は、桜の木の下に複数の個別区画が隣接して一つの墓域を形成する集合墓である。個別区画には家族・個人を特定するような墓標は立てず、近くに埋葬者の名前が何人かまとまって彫られた共同の銘板を置く。誰が埋葬されているか全くわからない「匿名」ではなく、埋葬ポイントは特定しないが、墓の周辺に共同の銘板をおく形式を筆者は「半匿名性」といつている。

〔井上2008〕

集合墓にした意味は①継承を前提としない非継承墓に適合的な形態であること、②「ゆるやかな共同性」が生成しやすい形態であることがあげられる。

一般的な墓は一区画ごとに墓石が立ち、墓所は外柵で囲まれている。こういう形式では、その家族に継承者が絶えれば無縁墳墓として片付けられてしまう。しかし、「桜葬」では、埋葬場所

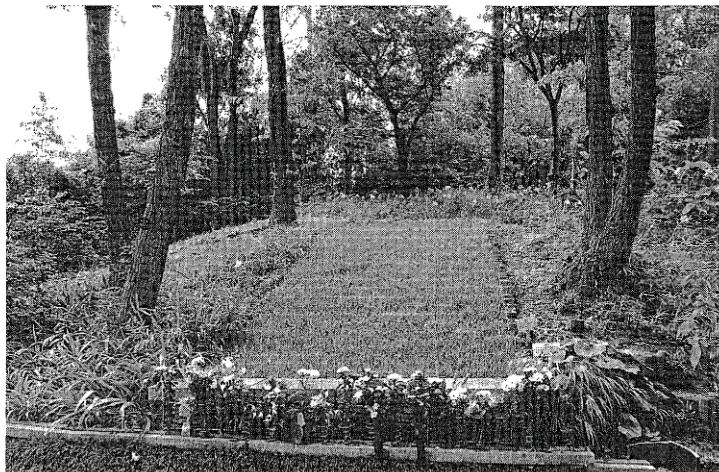


写真 1 桜葬墓

も特定され個別区画としての使用権をもつが、一区画ごとの外柵がなく個別区画が集合した大きな一つの墓域を形成するため、継承者がいない区画があつても、墓を皆で守つていくことができる。

桜の咲くころ皆が集まつて「合同祭祀」を行うので、身内がいなくても墓を同じくする仲間とともに供養されていく。家族も含み込みつつ、しかし家族という単位に縛られない。一本の桜の木の下に皆で眠り、皆が集う。そこに眠る人も、眠る人を偲んで訪れる人も、まさに「血縁」を超えた「結縁」でつながつていて。家族だけでは介護や看取り、死後の葬送を担うことが難しい社会で、桜を墓標として集まつた隣同士が、墓を核として縁を結ぶ。そこには家族を超えた絆＝「墓友」が生まれている。

この特徴を筆者は「ゆるやかな共同性」と言つてゐる。定められた血縁や、そこに住む限り絶対

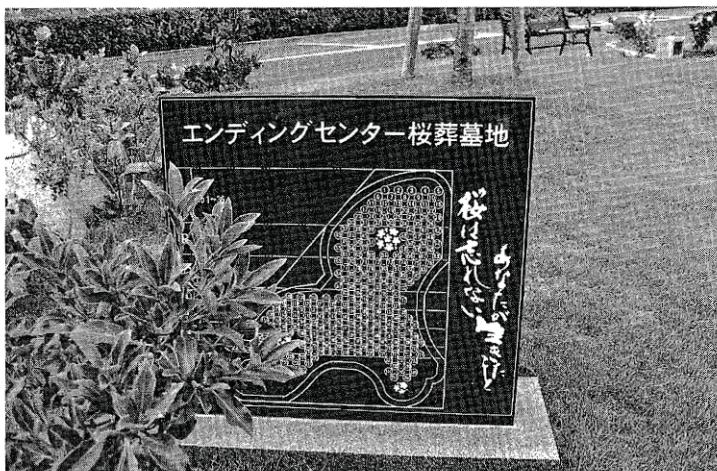


写真2 桜葬墓地の区画を記す石碑

的な縛りのある共同体ではない。行事の参加、不参加も自由に選べ、強制力をもたず、包括的なコミュニケーションを要求しない。毎月墓参に来ている人同士が出逢い、そこで同じような境遇や考え方とめぐり会って、そこから人間関係が生まれ「墓友」となるケースも増えている。自主サークルもできた。語り合いの会もある。このように自らが「これ」を選択したという高い意識を持った人々が集まって、ゆるやかにつながっている。

またエンディングセンターでは、葬儀の担い手を確保できない人々のために、自分の死後のことを第三者に委任する「生前契約」によつて、「喪主の代行」をはじめとするエンディングサポートを行つてゐる。葬送儀礼において家族が担つてきた役目の代替である。

2 会員の「語り」を通してみえてくるもの

ここでエンディングセンターの活動の中から会員が発した「語り」をもとに、墓を核とした「結縁」（ネットワーク）がいかなるものかを探ることにしたい。¹⁶ ①「語り合いの会」における会員の語り、②気功を行うサークル「ゆいの会」のメンバーの語り、③「桜葬メモリアル」の実行委員（会員）の語りを取りあげる。

「語り合いの会」——事例A（八〇代前半・女性）

エンディングセンターでは、東京都の新宿駅南側（住所は渋谷区）にある新宿事務所「スペー
スゆい」で、月一回「語り合いの会」を行っている。テーマを決めて話し合うこともあれば、自
由に語り合う回もある。次にあげた事例Aは、二〇一二年六月一四日一四～一六時に実施された
回におけるAさんの発言である。この日は特別なテーマが設定されていなかつたが、一～三月ま
でのテーマであった「おひとり様の生き方——シングルを通してきた方も、配偶者を喪失した方
も、いかに今を元気に生きるか！」が好評であつたため、この回の話もそういった内容を踏襲し
ていた。（）内は筆者の補足。傍線も筆者（以下同）。

町田市から来ましたAと申します。今日で三回目なんですけれども、みなさんのいろいろ

な話を聞いて、とても力づけられて、いまのところ来るのが楽しみに月一回やつて来ています。一回目は、皆さんのお話を聞かせていただこうと思つて来たんですよ。でも皆さんの話を聞いているうちに、なんかこう湧いてくるものがあつて。で、ちょうど主人が亡くなつて十三回忌を過ぎた後だつたし、ずっと自分の中に抑えていたもの、そのことをいつべんに吐き出させていただきて、なんかすごく心が軽くなつた思いがしましてね。同じ思いで皆さんいらしている方が多いということを初めて知りました、とても心強く思いました。自分でしかわからないことがいっぱいあると思うんですよね。こういう風に悲しかつた、こ^ういう風に看病した、と。（主人が）亡くなつた後に、自分が生きていかなければならぬ人生があるんだと、気づいたんです。主人が病気の時は夢中で看病することだけに没頭して来ましてね。亡くなつた後で、私はどうやつて生きていつたらいいんだろう。自分の生活があつたんだつていうことを初めて感じまして、戸惑つたこととか。その時に書道を若い時からやつてきたので助けられたと。そのようなお話をさせていただきて、とつても心が軽くなつた想いがしました。

Aさんが「語り合いの会」に参加した動機は、単に「皆さんのお話を聞かせていただこう」ということであつたが、「でも皆さんのお話を聞いているうちに、なんかこう湧いてくるものがあつて」と表現している。日常では話せないような本音が語られていたので、「ずっと自分の中

に抑えていたもの」をいつぺんに吐き出すことができて「すごく心が軽くなつた思いがした」と話す。語った内容とは、配偶者喪失による悲嘆と、夫を失つて初めて自覚した「今後の自身の生活」とその「不安」である。それは、子どもや親戚とも分かれ合えなかつたことであつたが、この日、初対面の人たちと分かれ合えている。その後Aさんは、墓参の折に当初の自分と同じような境遇の人、すなわち配偶者を亡くした人に出会い、話しかけて「語り合いの会」に誘つた。その人とは連絡先を交換し、時には食事などをしているという。さらに事務局からの依頼に応えて、書道サークルを立ち上げ、その講師を引き受けた。Aさんはそこで写経を中心に、絵手紙などを教えることになっている。先生も受講者も同じ会員で、サークル活動を通じて絆が深まり、最後は一緒のお墓に入る。こんなところに安心感を抱く人も多い。

気功のサークル——事例B（六〇代後半・女性）・C（六〇代後半・女性）

前記のように、エンディングセンターでは二〇〇七年から講師も受講者も、ともに会員という、「自前講座」を行つてゐる。当初はセンター主催の講座として発足するが、会員がその活動に慣れてきたころに自主サークル化するという方法を意図的にとつてきた。それは参加者にとって「用意された講座」から「自分たちのサークル」といった意識を高めるための試みである。その中で気功や東洋医学を学ぶサークルがある。「スペースゆい」で月一回開催されるので「ゆいの会」と名付けられた。二〇〇七年に講座が始まり、二〇〇八年にサークルとなり今日に至つてゐる。

本章でとりあげた「語り」は、二〇一一年一月一六日、読売新聞と東京新聞の取材を受けるため、いつもの「スペースゆい」から東京都町田市にある桜葬墓地へ移動し、泉心庵という建物の中で語られたものである。記者がインタビューする形式ではなく、氣功の先生（会員）を含めた四人の仲間が勝手に話す形式であつた。そのうちの二人が中心となつて話した会話を次に記すことにする。

B 私がCさんにいいところあるわよ、と教えたら、（Cさんは）すぐに（夫をお墓に）入れちゃつた。一番最初に入れた人。いちばん最後に入会したのに（皆の笑い）。もともと（Cさんは）お友だちだつた。でもね、お墓の紹介つてなかなか実際ではしにくいですよ。（そんなこと話せば）えつ、て思いますもの。「お墓の話はごめん」という人は多かつた。でもCさんはね、お墓を継いでみてくれる人がいないつていうのね。それがあるから、（桜葬つて）いいわよって。

C パンフレットをいただいて、すぐに見に行つて、しばらく（そのままで）いたんですけど、夫ががんになつたもんで、これは先に死ぬな、とか思つちゃつて。入れるところ探さなくちゃいけなくて。

B （Cさんが夫に）「あなたここに入るのよ」と言つたら「とつてもいいところだね」つて（言つたといふ）話を聞いて、やつぱり（紹介して）よかつたなつて。

C お天気が良い日で、ちょうど秋だった。日当たりがよく、ここに連れて来て、とつてもよかつた。

C (タクシー代が)三万六〇〇〇円かかりました、往復で(笑い)。がんの手術をした後連れてつたんですよ。(電車は無理)だからタクシーしか使えないなと思って、タクシーを使って現地へ行き、そこで降りて見せたんですね。ここよって言つた。すごい喜んで、入るところがあるつて、とつても安心しますね。

B 自分が安心するよね。

C します、します。

B そこに行きつくまで、うまくやろうと。それはね、ゴールが決まつているわけだから。そして、初めて会つた人でも、そこに入るということがわかつてゐる相手は、すごく、のつけからガードがなくなるんですよ。氏素性が分かるつてみたいなね。そういう感じがね、それはね、すごい安心。私、お墓を決めてから変わりましたもの。すごい穏やかになつた。

記者「それはなんですか？」

B わかつたから。以前は両親のお墓があつて。それを見てゐながら、こちらのお墓に決めましたもの。いいですよ。地に足が着いているような、しつかりとした生活ができる。今の若い人は分かんないでしょうね、きっとね。お勧めします、自分の行き先

を決める」と。

C ほんとですね。ほんとうに落ち着きましたね。ふらふら、ふらふらしてたんだけれど。どこで死のうかと思つていたんですよ。

冒頭の会話でもわかるように、BさんがCさんの夫の死を語るときでも、氣を使つた言ひ方ではなく、笑いがこぼれる弾んだ口調になつてゐる。それは十分な信頼関係があること、そして沈みがちな話を仲間同士で共有し、Cさんを活気づけるかのような意図さえ感じられる。

Bさんが墓を買つて穏やかになったのは、「わかつたから」と話す。その体験の語りは紙面の都合で要約すると次のようになる。Bさんは、子どもが娘だけの家の娘として生まれ、現在一人暮らしをしている。父は墓を買うとき寺側に「甥っ子を養子にもらつて、その子が面倒を見ます」と書いた。嘘だけれどね。（墓が）ほしかったから。そこにBさんも入り、Bさんは一人暮らしの友人も一緒に入れてあげようと考えていた。ところが、寺から拒否され、父の用意した墓には入れないことを自覚させられた。ただ、父が買つた後、その墓をとても愛して、いつも参つていたことが印象として残つていた。自分も墓を買つて「すごくうれしかった」とい、父のその気持ちがよくわかると言う。

BさんとCさんは、墓の繼承者がいなくて一般的な墓には入れないという共通点があつた。だから墓を買うことで行き先が決まり、「落ち着いた」「すごい穏やかになった」「すごく安心」と

いう言葉が目立つた。また、Bさんが「初めて会った人でも、そこに入ることがわかつて
いる相手は、すごく、のつけからガードがなくなるんですよ。氏素性が分かるつてみたいなね、
そういう感じがね、それはね、すごく安心」というように、同じ墓を選んだ人は、それだけで信
頼していることがわかる。

「桜葬メモリアル」実行委員の「語り」——事例D（六〇代後半・女性）・E（六〇代後半・女性）・
F（七〇代前半・女性）

桜の花が咲くころエンディングセンターでは「桜葬メモリアル」という合同祭祀を行っている。
二〇一二年は四月八日に行われた。事務局だけで施行するのではなく、このようなときでも会員
の積極的な参加を求める「実行委員会」方式で執り行っている。「ただ参加するだけでもいいが、
実行委員になれば三倍楽しい」を合い言葉に、会員も集まって準備をする。メモリアル前には実
行委員会が数回開催され、三月三一日の委員会終了後、DさんとEさんは、テレビの取材に応え
て会員同士の関係を語った。Dさんが「親しみを感じますのよ。近所のうちの方より断然仲良し
ですよ。みなさん親しみをおぼえますもの」と語ると、隣にいた会員も「安心して話せます」と
加えた。地縁よりも墓を核とした「結縁」による人間関係のほうが「安心」であると言いつつ
いる。そしてメモリアルを翌日に控えた四月七日、当日働く人々の顔合わせを兼ねた前夜祭が開
かれた。そのときの話を次に記す。会員の一人が自分で書いたエンディングノートを見せようと

持つてきていた。

D これは家系図、私と夫と。葬儀の仕方もここに書いてあるわよ。お袋はこんな風に育ったから、あんな人ができたんだって（笑い）。

E こういうことつきつかけがないと話せないと話せないでしょ。なかなか親子で話しているようで、話せないじやない。（こんなふうに話せるることは）素敵なことよ。

F 延命措置はね、しないでくださいって書いておこうかなと思つてているの。

D 七五歳を過ぎたら絶対、高度な医療は受けないほうがいい。自然死でいいっていう風に書いたよ。

E 延命措置はいらぬいっていうけれど、どこからが延命なの、というのがあるじゃないですか。

D 本人が、書いて残して、これが私の望みだというふうに言わない限り、みんなそれぞれ情で、できないもんですよ。

E お友達とか、いろいろな考え方があるじやないですか、そういう中でなかなか「私たちの考え方」出せないじやないですか。

F 出せない、出せない。

E F いいご縁をいただきました。

これらの発言を見ても、自分の死を見つめ準備をしていることを楽しそうに話している様子がうかがえる。それは、近所、親子、友人でも話せない「いかに死ぬかということ」を、語り合える人たちに出会えていることがうれしいのである。

また興味深いことは、会員たちに「死後の地域社会」ともいうべき観念が芽生えていることである。それは次のような会話から見えてくる。次に記すのはメモリアル当日、儀式が始まる前に、墓へ行き、仲間同士、それぞれのお墓を紹介し合っている様子である。

E ここなの、よろしくね。あっちに行つたら遊びましようね。

D これはね、紹介します、夫の○○和夫です、よろしくね。

F あ～あ、わかりました。よろしく。○○（夫）もあの辺に入っていますから。

D ○○さんは、はまさしく町内会。

F 今から、楽しいね。（向こうで）会えるのが。

皆 楽しい。そう、そう、そうね。楽しいね。

D 晩年は楽しいですね。同時代を生きて、時代を選択したという、何かゆかりを感じる。ご縁を感じる。

F 安心ね、安心。

この会話を交わした「桜葬メモリアル」から約四ヶ月後の八月一日、三人にここで語った「死後の近所づきあい」について、どのような想定をしているのか、さらに尋ねた。するとDさんは「今を生きているその中の思い。あの世のことは私的にはよくわからないけれど、ご縁ができて安定感があった」という。Eさん「石の下に入るんじゃなくて開放感があります。あっちに行つたら会えるって思つてますよ。友達と、ここ（桜葬墓地）でワイン片手におしゃべりしましょ、といつてはいる。夜景がきれいだし。これ聞いたら怖いわね」。Fさんは「科学的に考えれば、そういうことはないだろうけれど、でもわからないから。物理的にそう思つて生きるほうが、楽しんで生きられる。最後を考えると不安じやないですか、怖いですよ。そう考えれば、それがない。死はこわい。不安ですよ。死は考えると恐怖だから、死んだら楽と思いたい」と語つた。

このように、死後の世界は「ないだろうけれど、でもわからない」（F）、「あっちにいったら会えると思つていますよ」（E）と、三人のニュアンスが微妙に違うが、死を意識しつつ生きるときに「死後の地域社会」を想定することで、「より安心して生きられる」と考えていることがわかる。この世から他界を想像し、ワインを片手にお墓で楽しく話している光景を思い浮かべたEさんは、逆に、これを聞いたこの世の人の感覚になつて考え、「怖いわね」と、笑いながら付け加えた。

3 「桜葬」と「橋渡し型」ソーシャル・キャピタル

ソーシャル・キャピタルの形成には、信頼、規範、ネットワークといった要素が深く関係していると言われている。そのうち「信頼」についてパットナムは、「知っている人に対する厚い信頼」より「知らない人に対する薄い信頼」の方がより広い協調行動を促進すると指摘している。この「知らない人に対する薄い信頼」の有効性については、まさしく桜葬の会員組織に当てはまるだろう。桜葬に集まってきた人たちとは、BさんとCさんのように知り合いだった人はごくまれで、多くの場合、墓を買うまで全く別の人生を歩んできた縁もない人たちである。それがAさんのように、初めて参加した語り合いの会で、親戚や子どもにさえ話せなかつたことを話し出すだけの「信頼」を感じている。それはBさんの語りの中の「初めて会った人でも、そこにに入る」ということがわかつている相手は、すごく、のつけからガードがなくなるんですよ。氏素性が分かるってみたいなね。そういう感じがね、それはね、すごい安心」といった言葉によく現れている。

ただ、そこに信頼するに足る何かがなければ、このようなことは起こりえない。それは何か。桜葬を核とした「結縁」のネットワークが存在する社会は、近代社会における確実性が崩壊し、確信できるものを欠いた状態のなかで、新たな確実性を見いだし、創造することを人びとが強い

られている社会であると前に書いた。それは具体的にいえば次のことである。

伝統的な日本社会では介護・看取り・死者供養といえば、家族が担うものとされ、それは人々に疑う余地もないほど当然のことと認識されてきた。ところが、終戦後に結婚し核家族を形成した「戦後の核家族第一世代」が高齢期を迎えた一九九〇年頃になると、状況は大きく変化し始めた。⁸ 地縁・血縁が希薄化したばかりか、核家族の晩年は子どもが離家して「夫婦だけ」となり、最晩年は配偶者を喪失して「独居」を余儀なくされる。だとすれば晩年は個として、どう生きどう死んでいくか、自分でコーディネートしなければならない社会が到来しているのである。よく「自己決定」を「利己主義」と捉える人がいるが、そうせざるを得ない社会的状況がある。これまでの地縁・血縁・社縁に代替するサポートネットワークを創造していくなければならない社会もある。

そういった中で相変わらず崩壊しかけたシステムに確かさを追い求めようとする人もいれば、勇気を持つて古い規範を超える決断をする人もいる。ベックは「選好や生活の局面が変化した場合、人は、たんにその人の生活歴だけでなく、その人のコミットメントやネットワークをも産みだし、自分で立案し、自分で演出することを強制されていくのである」「結婚や家族に関する伝統でさえも、個人の意思決定に依拠しはじめており、人びとは、こうした矛盾をすべて個人的なリスクとして経験せざるを得なくなっている」という[ベック 1997, 323]。桜葬を選んだ人々は、墓は「家族」で入り「血縁」によって継承するものといった伝統的な規範を自らの意志で脱ぎ捨

てた、今まだ少数派の人々である。彼らは、単に「好みが一緒」というレベルの話ではなく、不確実な社会の規範のなかで「自分で選んで一歩踏み出した」という選択意識の共有があり、それは「確かにもの」であつてもらわなければならず、そのための協力意識も高い。Dさんが「晩年は楽しいですね。同時代を生きて、時代を選択したという、何かゆかりを感じる」と語るが、自らが信ずる規範で伝統を脱ぎ捨てたという共通点と、互いをたたえあい、支え合つていこうという気持ちがそこにはある。

このような信頼関係のもとでは「お互いさま」などという言葉で表されるような、直接的な見返りを求める規範ではなく、自分の行為が、いはずれは自分にもめぐつてきることがあるという、長期スパンで考えた相互扶助を当然とする規範が働いている。信頼関係が互酬的な慣行を普及させ、ネットワークを強化し、それがまた信頼を生み出すといったメカニズムとなつていて。つまりパートナムのいう「橋渡し型」のソーシャル・キャピタルのあり方をそこに見ることができる。さらに興味深いことを付け加えるならば、「死後の地域社会」を生前に想定して生きているところである。「死んでも近所どうし。死後も淋しくない。あちらに行つて遊びましようよ」などといった発言が聞かれる。これは確実に他界があると強く信じているというよりも、むしろそう考へることで、死を意識した生が安らかに送れるという実感にもとづく思考であつた。

おわりに

「桜葬」は、「家」「家族」という他者との境界を際立たせるのではなく、むしろ「家」からは自由になることを目指した。かといって個々人がバラバラになるのではなく、みずからが望む死後を選択して理想の死後のあり方を実現することで、他者とのゆるやかな共同性をつちかう。そして、家族も含みつつ、樹木のもとで自然の永遠性にかぎりなく回帰していくことがその理念にある。桜葬を選んだ人たちとは、不確かな時代に伝統を捨てて、新しいシステムを積極的に選び取ったことに満足し、その共通点に信頼感を抱き、みな生き生きとしている。

「無縁」は網野善彦氏が『無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和』(平凡社)で説いたように、決してネガティブなイメージではない。「駆け込み寺」のように、公権力の及ばない場所に逃げ込めば、縁を切ることができる、という救いへの希望であつたり、西欧のアジールを意味した。「桜葬」の存在は、不連続の家族に連続性を課する墓の家の継承システムからの逸脱可能なアジールであるとも言えるであろう。墓が血縁者による継承がまだ主流である社会で、家族による継承制から脱したところに、少数派であるがゆえの結束力を高めている。また、伝統的な社会では高齢者が死を語ることはタブー視されてきたが、語らなければいられない社会で、本音で語り合える場を得て、会員たちはより互助的なシステムの構築を模索し始めている。

〔注〕

- 1 NHK「無縁社会プロジェクト」取材班は、二〇一〇年一月三一日からいくつかの番組で何回かに渡り「無縁死」を中心、「無縁社会」の実態を報道した。その内容や、取材現場で得た情報等を『無縁社会——「無縁死」三万一千人の衝撃』（文藝春秋、二〇一〇年）として刊行した。
- 2 「けつえん」と読み、仏教用語の「けちえん」を超えた概念として、地縁・血縁・社縁等が希薄化し、無縁社会と呼ばれるような社会にあつて登場した語で、新たに結ぶ縁、言い換えればネットワークをいう。
- 3 井上治代「ポスト近代社会の墓における『共同性・匿名性』の一考察——スウェーデンと日本の事例から」『ライフデザイン研究』四号、二〇〇八年、東洋大学ライフデザイン学部紀要
- 4 墓石を建てて樹木をシンボルとして遺骨を土中に埋める自然志向の葬法をいう。同じ自然志向の葬法でも、「散骨」は、遺骨を撒くことに関しては法規定がないため、「墓地、埋葬法に関する法律（墓埋法）」の範疇外で行っているのに対し、「樹木葬」は墓埋法に則つて墓地として許可を得た区域で行うため、遺骨を埋めることができることが散骨と異なっている。
- 5 日本の一般的な墓は、代々繼承者を決めてその者が管理料を払うという条件のもと、永続使用する繼承制がとれられている。繼承者が絶え管理料が途絶えれば、所定の手続きを踏んで、遺骨は別のところへ片付けられ、墓の使用权を失う（無縁墳墓の改葬）。一九八〇年代後半から、子どものいない夫婦や未婚者など、繼承者を確保できない人々が増えて、繼承を前提としない墓が出現した。それを筆者は非繼承墓といふ。寺が運営するものは「永代供養墓」とい、行政のそれは「合葬式墓地」「合葬式納骨堂」「合葬墓」などと呼ばれている。多くの樹木葬墓地も非繼承墓である。近年では、子どもがいる人で非繼承墓を求める人が増加している。
- 6 筆者の立場はエンディングセンターの理事長であるため、事務局スタッフとして活動に参加する一方で、研究者としては参与観察法をもちいて研究を行つてゐる。初めから会員に了解を得て研究者として行うインタビュー調査もあるが、本稿で使用した「語り」は、参与観察から得られた「語り」の資料を、原稿を執筆の段階で、本人が特定できないようにするなどの倫理的な配慮をし、本人に承諾を得て使用してゐる。
- 7 フジテレビ「ノンストップ」という番組が、三月一日、四月八日までのエンディングセンターの行事を、ドキュ

メンタリー風に撮影し、四月一一日の放送で放映された。

- 8 「戦後の核家族第一世代」等については、井上治代「家族の彼方——『集団から個人へ』価値意識の転換」(池上良正／小田淑子／島薗進／末木文美士／関一敏／鶴岡賀雄編『宗教のゆくえ』(岩波講座「宗教」)一〇) 岩波書店一〇三、一三二頁のうち、一〇八、一〇九頁を参照のこと。

【参考文献】

- 網野善彦『無縁・公界・樂——日本中世の自由と平和』(平凡社、一九七八年、増補版一九八七年
井上治代「ポスト近代社会の墓における『共同性・匿名性』の一考察——スウェーデンと日本の事例から」(『ライフデザイン研究』四号、二〇〇八年、東洋大学ライフデザイン学部
ウルリッヒ・ベック／アンソニー・ギデンズ／スコット・ラッシュ『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文／叶堂隆三／小幡正敏訳、而立書房、一九九七年
ウルリッヒ・ベック「政治の再創造——再帰的近代化理論に向けて」(ウルリッヒ・ベック／アンソニー・ギデンズ／スコット・ラッシュ『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』松尾精文／叶堂隆三／小幡正敏訳、而立書房、一九九七年)
N H K「無縁社会プロジェクト」取材班『無縁社会——“無縁死”三万二千人の衝撃』文藝春秋、二〇一〇年
ロバート・D・パットナム『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』(叢書／世界認識の最前線)河田潤一訳、NTT出版、二〇〇一年

【キーワード】

・非繼承墓

一九八〇年代後半から顕著になつた、子どものいない夫婦、未婚・離婚、再婚者など、墓の繼承者を確保できない人々の増加を背景に登場した繼承を前提としない墓をいう。寺が運営する非繼承墓は「永代供養墓」と呼

ばれ、行政のそれは「合葬式墓地」「合葬式納骨堂」「合葬墓」などと呼ばれている。多くの樹木葬墓地も非繼承墓である。

葬送の社会化

葬儀や墓における死者祭祀はこれまで家族が担うことが一般的であったが、近年、看取りや葬送の担い手を確保できない人々が増加している。そういったことを背景に生前契約による葬儀や死後の事務処理、墓での合同祭祀など、家族を超えた人々による葬送儀礼を執り行うシステムやその実態をいう。

結縁

地縁・血縁・社縁等が希薄化し、無縁社会と呼ばれる社会にあつて登場した語で、新たに縁を結ぶ行為、あるいはその状態。言い換えればネットワークともいえる。

【書籍紹介】

井上治代／NPO法人エンディングセンター『桜葬——桜の下で眠りたい』三省堂、二〇一二年

前身の団体を含め二〇年あまりが経過したNPO法人エンディングセンターが「桜葬」を企画するまでの経過と桜葬の理念 申込者の手記、設計家による設計理念、そして各地の桜葬ネットワークの寺を紹介している。
ウルリッヒ・ベック／スコット・ラツシユ／アンソニー・ギデンズ（松尾精文／叶堂隆三／小幡正敏翻訳）『再帰的近代化——近現代における政治、伝統、美的原理』而立書房、一九九七年
近代化を成し遂げた後に出現している現代社会を把握するために「再帰的近代化」の概念を把握し、その特徴である「グローバル化」や「個人化」について理解するための適書。

網野善彦『無縁・公界・樂——日本中世の自由と平和』（増補版、平凡社選書）一九八七年

歴史の表舞台に登場してこなかつた遍歴漂泊する職人・芸能民・勧進聖などに注目し、世俗の人間関係とは「無縁」な関係を追究する。「無主」「無縁」の原理を担つた人々の力こそ、眞に歴史を動かしてきた弱者の力である、という著者の主張は、從来の日本史像に新たな視点を与えたばかりでなく、人間の共同体のあり方について、普遍的な問題を提起している。